



左から日進温室組合農・田辺正宣さん、レポーターの岩瀬好美さん・右手前 橋野君佳さん・右奥 本田幸恵さん

## 新しい経営法で 今後の農業を考える

農産物輸入拡大の影響で、農業の危機が叫ばれている一方、独自の農業を営み高付加価値の農産物を生産している人たちがいます。

そこで今回のママさん探訪記では、新しいスタイルの農業に取り組む農家を訪ね、そこでの農業経営、考え方等をレポートしながら、今後の農業の在り方を考えてみました。

りっぱな後継者に育つてほしいとの願いがこめられているのを感じました。

八代市北西部に位置する昭和日進町。今を遡る」と六十五年前、大正時代に干拓されたこの土地は、当時干拓入植者の農業指導者として招かれた松田農創設した日本農友会実習所（通称松田農場）を中心と発展してきました。松田氏逝去後は、田辺正宣氏がその農場經營を引き継ぎ、農事組合法人「日進温室組合」を結成。現在は正氏の長男、正宣氏が組合長として活躍されています。

組合は八戸の農家から成り、ハヘクタールの温室内にミニトマトやメロンを栽培しています。組合の運営はとても民主的。品種・肥料・栽培技術などの決定は、奥さんたちを含めた全員で徹底的に話し合います。しかし、各人の責任を明確にし、生産意欲を高めるためアパートメント方式という実力主義の分担生産制を取り入れ、高収入をあげています。

ここでは現在東京の市場との契約栽培の形で生産が行われています。どの品種をいつ、どれだけの量納品するのか、市場側が事前に指定してくるそうです。しかも一たん契約すると例え自然相手であろうとも失敗は許されません。「そのブレッシャーの中で着実に伸びてきているのは八戸の農家のチームワークの良さと、農業の基本の土づくりがしっかりといたからでしょう」と、組合長の田辺

さん。「農業にとって一番大切なことは土づくりです。ミニスガ住むような肥沃な土を作り、丈夫な根が育つようにする。頑丈な根からは十分な栄養が吸収されるから健康な母体が育つ。すると病害虫への抵抗力も強くなり、自然と農薬の量を減らすことが出来ます。」

健康な土づくりをすれば、農薬を減らしても立派な作物はできるということです。このため組合では七月の農閑期に全温室でヒ工を栽培し、土に残った余分な養分や有害な微生物を吸い上げさせ、それを再び土に戻して肥料にする。良質の土づくりに励んでおられます。

さて、ここでは奥さんたち一人一人も大きい役割を担っておられます。研究、視察等で多忙なご主人たちに代わって一日の作業を進めたり、お産や病気の時にはお互いカバーしあい、年に一度は東京へ商品販売の研修に出かけたりもします。

また、とかく農業には休みがないというイメージがありますが、この組合では企業的経営を取り入れ、作業は朝八時から夕方五時まで。また、ガラスハウスは、雨の日も作業ができるため日曜日は休み。「これも後継者対策のひとつです」とおっしゃる奥さんの言葉に、子どもたちにゆとりある農業を理解してもらいました。



一面のカラフルアート